

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

政治への不信感～お前でなく俺のせい

平成15年11月、小泉首相の下で初めての衆議院議員総選挙が実施される。

われわれ一般の有権者が、直接政治に参加できる最大の機会は「選挙」であることは、言うまでもない。貴重な一票を投じることは、民主主義を支える、最低限の「義務と権利」を果たすということに他ならない。

よく、「政治が悪い」「悪い政治家がいる」という言葉を耳にするが、民主主義の本道から言えば、本来悪い政治家がいるはずがなく、悪い人を政治家に選んだ不甲斐ない有権者が多かった...ということなのである。良きも悪しきも、生まれ育ってそのまま政治家という人は、現在この日本国には存在しない。政治家である以上必ず「選挙」で当選しなければならず、したがってその人を選び、自らの意思を託した人々がいたはずである。この選んだ人たち、つまり「有権者」のレベルにより、「国家」そのものが決まってくるシステムが、民主主義の根幹であろう。

そうだとしたら、貴重な一票を投じることは、文字通り、大変大きな責任があるはずである。その選択肢は、色々だと言える。「昔からお世話になっている」縁が深いのも理由の一つであろう。政策に共鳴するのは本来かもしれない。有名人、知名度が高いという理由で選ぶ人もいる。要は、個々の選択基準そのものから、つまり有権者のレベルであり、その結果が政治のレベル、国のレベルと置き換えられる話である。

現代は正に「政・経一体の時代」である。政治だけが全く独自に存在するわけではなく、逆に政治を無視して経済の活性化はありえない。端的に言えば、経済の分からない政治家は存在意義はなく、政治を理解しない経済人や経営者は、その役割すら果たせないでいる。

政治をいい加減に片付けてはならない。そのために我々有権者は、もっともっと勉強すべきである。四年に一辺選んだら選びっぱなしにせず、しっかりチェックすべきである。自らの政治レベルの底上げを目指し、そのクオリティを地域コミュニティに伝播させるべきである。

今、この「選挙の年」に、もう一度政治について真剣に考えてみたいものである。一人一人は小さな力でも、それが積み重なり大きなパワーとなっていくのが民主主義である。その民主主義の根底を支えるわれわれ有権者が、より大きな声で自らの権利を主張していかなければなるまい。そのためには、自らの義務を堂々と果たすというのが大前提である。実は経済の根幹的活性化の大本は、政治レベルの貧困さと政治力の乏しさに根付いているのかもしれない。正面から政治を語り合う、そんな機会と仲間をより多く創っていく...この繰り返しの中で、政治は確実に変わっていくはずである